

3月の

園便り

新潟青陵幼稚園 20年

雨が降ると木々の葉や枝先に、雨のしずくがぽつんとついて、とてもきれいなのです。特に松の葉の先についたしずくはイルミネーションのよう----- ある朝のこと、幼稚園バスから降りた、青ばらのMちゃんたちが数人で「木の実～、木の実～、美味しいね～」と、葉先についたしずくをとっているのです。雨の日には、いつも見られる“しずく”見慣れているはずなのに---なにもこんなに寒い日に?----と、思って女の子たちの側に行くと、松の葉先のしずくにさわってみると、「あ!!ほんとに木の実だ!」と驚きました。

雨のしずくが凍っていて、指でつまむと取れるのでした。素敵な木の実でした。子どもたちのものを見る目の鋭さに、感動しました。自然の変化を見のがさない子どもたち、この子たちはきっと、これからも多くのことに気づき、興味を持って関心を持って学び、友だちと喜びを分かち合う子どもたちになることでしょう。

さて、松林の中のきいちごは、2月になると新しい葉っぱが出始め、すでに多くの葉を伸ばしています。やわらかい黄緑色の葉は春を感じさせてくれます。植物はじっと冬の寒さに耐えながら、静かに--しずかに、葉や花を準備し、やがて来る春を待っています。

幼児期の教育も、植物が冬の間に力強い葉や美しく咲く花の準備をしているのと似ています。知性のある大人になるために、ひたすら目には見えない成長を積み重ねる幼児期です。これができる、あれもできると目に見えるいろいろなものができたとしても、幼児期に育つべき心やコミュニケーション能力、生きる力などの部分に未熟さがでてしまいます。

“できる・できないの世界”に子どもを置けば、与えられたものは、ひととおりにやることはできても、意欲を持って自分の世界を切り開いていく力、友だちとともに喜びを持って進もうとする気持ち等々は育たないのです。意欲も意志も感性も友だちとかかわる力も社会性も表現力も----こうした幼児期に学ばなければならないものは、目に見えにくい力です。その力を信じていられるかどうか、子どもを信じて待つことができるかどうか、大人が問われています。子どもたちがやがて大人になったら、しなやかな枝を大きく伸ばし、なにより美しい花を咲かせるであろうことを信じて、やらせるのではなく、自らやろうとすることができるように、“子ども自身に生きさせる”ことが必要です。幼稚園の一日の長い時間に、子どもたちはあらゆることに真剣に取り組み、試行錯誤を繰り返し、主体的に学んでいます。その一日が一年間積み重ねられていきます。のぼら劇場は、子どもたちが主体的に想像創造し、協力共同して作り上げたものです。子どもたちが子どもらしく過ごすことができる安定した環境の中、着実に内面を充実させてきたことがよく分かりました。子どもたちの成長が目に見える、貴重な、且つ、嬉しいひと時でありました。